Chapter 33 : **愛の運とレックウザ三度目の墜落 Part 3**

ティラニタルの怒りの救出劇による地響きが街を揺るがし続けていた頃、その衝撃波は誰にも気づかれずに広がっていた──ただし、下校中の二人の生徒を除いては。

リバーサイドパーク近くの古い木製の橋を、ブースターとシャワーズが歩いていた。制服の裾が微かに風に揺れ、シャワーズのプリーツスカートがふわりと舞う。ブースターは長ズボンに半分開いたジャケット姿で、何か話していたその時だった。橋の梁が深く唸りを上げた。

板が軋み、突如として揺れた。

「うわっ──！」と叫ぶ間もなく、ブースターは足を滑らせ、欄干を越えて落ちた。

「ブースター！」  
シャワーズはすぐさま通学鞄を投げ捨て、完璧なダイブで橋から飛び込んだ。

ブースターは必死にもがいていた。泳げない彼にパニックが襲いかかる──その時、冷たくも優しい水の流れが彼を包み込んだ。

水面を割って現れたシャワーズは、慣れた動きで彼を抱きかかえ、水中で足を動かしながら岸へと向かった。まるで花嫁抱っこのように。

「安心して。あたしがついてるから」  
その声は静かだが力強かった。

ブースターは真っ赤になりながら咳き込み、必死に彼女にしがみついた。「あ、ありがとう……」

しかし、足が地面に着いたその瞬間──シャワーズは一切の間を置かず、まだ彼を抱いたまま、その唇を彼に重ねた。

ブースターの目が大きく見開かれ、顔は毛の色よりも赤くなった。「な、なんで、シャワーズ！？」

「まだ助けが足りなさそうだったから♪」  
シャワーズはヒレを軽くはねさせながら、いたずらっぽく笑った。

その近く、茂みの中から、エーフィが静かに微笑みながら見守っていた。  
「青春ドラマの開花ね。……伝説ポケモンをまた呼び出さない限り、黙認してあげましょう」

その頃、地下のサーバールーム。薄暗い空間に、チカチカ光るRGBライトと働き過ぎのGPUの唸り声だけが響いていた。  
その中で、バリヤードが汗だくでパニックに陥っていた。画面には「指名手配：不正ギャンブル技術」と表示され、画面の隅にはバシャーモの燃え盛る警察エンブレムが光っていた。

「またかよ……！」  
キーボードを叩きながらバリヤードは唸り、点検口へと飛び込んだ。バシャーモの緊急捜査ドローンが彼のコードの痕跡を探していたが、紙一重で逃れた。

資金はレックウザの修理費と口止め料でほぼ底を尽き、もはや逃げ場はない。  
最後の手段──NFTベースのガチャソシャゲを、可能な限り最低のクオリティで作ること。

72時間以内に、「TIMI TIMMY：Crypto Chaos」はリリースされた。

内容はゴミそのもの。グラフィックは引き伸ばされたフリー素材ポケモンのコラ、台詞は壊れた機械翻訳、プレイヤー層はほぼチャットボットの成りすまし。レビューも全て偽物。「最高のNFT！人生変わった！ - ピカチュウファン420」

──だが、いかに狂った世界でも、因果応報は存在する。

三ヶ月後。仮想通貨の暴落、サーバー維持費の急騰、そして「色違いスイクン・トークン（0.0000001%確率）」すら買う鯨がいなくなった。

バリヤードは、自分の収益がマイナスになるのをただ見つめていた。

破産。ブラックリスト入り。

彼が取った選択は──ティラニタルの「ワリオウェア部門」に、清掃員として再就職することだった。

いま彼は、自販機のそばでモップを握って床を拭いている。廊下で誰かが「ガチャ」と言うたびに顔をしかめ、自分の失敗作のポスターがゴミ箱から覗いている。

通りすがるティラニタルが、ふと呟いた。  
「サーカス芸人のままで良かったんじゃねぇか？」